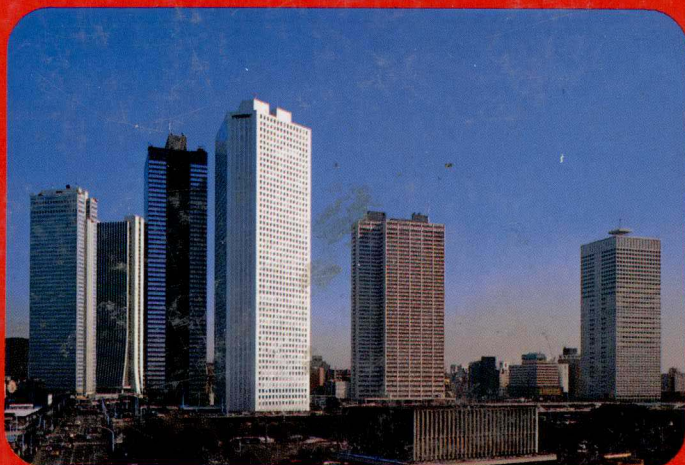


三省堂 小学国語 辞典

第6版

石黒 修・中沢政雄 編



三省堂 小学国語辞典

第6版

石黒 修・中沢政雄 編



三省堂

1959 年 3 月 5 日 初 版 発 行
 1961 年 2 月 1 日 改訂版発行
 1971 年 2 月 10 日 第三版発行
 1974 年 3 月 10 日 第四版発行
 1977 年 12 月 1 日 第五版発行
 1981 年 12 月 20 日 第六版発行



三省堂 小学国語辞典 第六版

定価 一、三〇〇円

一九八五年 三月一〇日 第二三刷発行

編 者 石 黒 修(いしぐろ・よしむ)
 中 沢 政 雄(なかざわ・まさお)

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

印刷者 図書印刷株式会社

発行所 株式会社 三省堂

〒三二 東京都千代田区三崎町二丁目二十二番十四号

電話 編集(〇三)三〇一四二

販売(〇三)三〇一四三

総務(〇三)三〇一五二

振替口座 東京 六十四〇〇

<6 版小学国語・816 pp.>

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN4-385-13404-9

これはあなたの辞典です

この「小学国語辞典」は、いまから二十五年前、小学生のための国語辞典として、日本で初めて作られた最も古い歴史のある辞典です。それから今日までずっと、使いやすい辞典、楽しい辞典として親しまれ、いつもみなさんの机の上にあって、国語の勉強を助けてきました。その長い間には、学習指導要領や教科書が変わり、学習漢字の数や読みかたや字形などが改められました。そのたびに手を加え、ことばの数を増やして版を新しくしてきました。今回は、国語教科書が新しく作られ、これまでの当用漢字にかわって、新しく常用漢字が定められましたので、六回めの書きなおしを行いました。

このたびは、とくにつきのことを中心に書きなおしました。常用漢字の種類や読みかたにしたがった、漢字の書きかたを示しました。また、みなさんが使っている全部の国語教科書の中から、新しくことばを選んで説明を加えました。

この辞典は、小学校三年から使うことができます。みなさんが読み書きする上にとくにたいせつな、もとになることばには*印をつけました。ことばの使い方を示す具体的な例のほか、相対する意味を表す対照語、反対の意味を表す反対語、意味のにている同類語も示して、ことばの意味や使い方がいつそうよくわかるようにしました。そのほか、発音が同じことばには、

アクセントが示してあって、その区別くべつがわかるようになっていきます。また、ことばをかなで書くはあいのかなづかいや、ことばを漢字とかなで書くはあいの送りがなのつけ方もよくわかるようになっていきます。

この辞典は漢字辞典としても使えます。後ろについている漢字かんじきくいんをじょうずに使うと、漢字の読み（音おんや訓くん）や意味、熟語じゆくご、書き順かきじゆん（筆順ひつじゆん）、漢字の部首ぶしゆや画数かくすうなどがわかるようになっていきます。

この辞典はあなたの辞典です。

いつも手もとにおいて、おつくりがらずに使ってください。本を読むときには、意味のわからないことはや読めない漢字を調べます。作文を書くときには、ことばや漢字の使い方、送りがなやかなづかいを調べます。そんなときにきつとこの辞典はみなさんを助けてくれます。なお、この辞典には、ことばや文字もじや文法ぶんぽうの勉強にやくだつ「ふろく」や、本文の中に「かこみ」記事きじがあります。これもよく読んでください。

終わりに、この辞典をつくるにあたって、お手伝いいただいた田近洵一先生をはじめ、たくさん先生のたにお礼れいを申し上げます。

昭和五十六年十二月

中 石
沢 黒
政 修
雄 修

この辞典の使い方

みなさん！この辞典をみなさんの友だちのように、いつもそばにおいて使ってもらえるよう、この辞典には、いろいろの工夫がされています。野球やバレーなど、スポーツにルールがあるように、辞典にも約束（ルール）があります。この辞典をよりよく使いこなすために、早くこの辞典の約束をおぼえて、いつも気軽に引いて、すべての学習の基礎になる国語の力を向上させましょう。

なお、たびたび出てくる約束については、本文のページの両側（これを見開きという）の下の部分に示してあります（これをフットまたは脚注という）。忘れたときは、それを見ましょう。

一、この辞典で、どういうことが分かるか。

① 分からないことばの意味が分かる。

教科書や図書、学校あるいはふだんの生活の中で、読んだり、聞いたことば（国語）は、わたしたちにとっては日本語で、分からないことが出てきたら、この辞典を引きましょう。たとえば、「うろこ雲が空に浮かんでいる」という文の中で、「うろこ雲」が分からないときは、「う」の部の「うろこぐも」（五十六ページ）を引きますと、「白くて、小さいまだら雲。サバやイワシのうろこに似ているので、この名がある。けん積雲の一つ。さば雲、いわし雲ともいう」ということが分かります。そのことばの説明の中に、**絵**というしるしがあれば、そのページが前後のページに**さし絵**がありますので、それを見て理解して下さい。

なお、黒い**絵**のしるしがあるときは、矢印の先のことばの**さし絵**を見て下さい。

② ことばのはたらきや使い方が分かる。

あることばに、どんなはたらきがあり、どんなときに、どのような使い方が言い回しをすればよいのか。そういうことがよく分からないときにこの辞典を引きましょう。説明や用例（例や例の下に出てくる）で、それが分かります。たとえば、「完全」は、「**完全**なできばえ。仕事を完全

に仕上げる」のように、他のことばの上にきて、下のことばの意味をはつきりさせるはたらきがあることが分かりますし、家の中にずつという意味の「こもる」は、「**家**にこもっています。山寺にこもる。心のこもったことば」、「**採点**」は「**採点**する。採点表」のようなはたらきがあることが分かります。「こんもり」は「**雲**こんもり（ど）もりあがった丘」のように、「こんもり」だけでも「こんもりと」のかたちでも使われることが分かります。「**里心**」は「**雲**里心がつく」という言い回しで使うこと、「**山の上**」の「の」は、「あることばの下について」使われることが分かります。「なれあい」は、「悪い意味に使う」ことが分かります。見出しに、たとえば、「さ」とか、「お」とか示されているときは、そのことばが、いつも他のことばの下について使われる（「さ」か、他のことばの上について使われる（お））ことを示します。

③ ことばの歴史や由来が分かる。

そのことばが、近代になって、外国から入ってきたことばなのか、古くから日本にあったことばか、また、ふだん使われることばか、古い言い方なのか、などを知りたいとき、この辞典を引きましょう。たとえば、「スタート」は「**リキ**」から入ったことば、「**ナイター**」は「日本でできた英語ふうのことば」であることが分かります。「さらば」ということばは古いことばであることも分かります。

なお、この辞典には、現代のことばを中心に収められていますが、みなさんに必要な古いことばや意味も入っています。

④ ことわざや、きまつたいい方が分かる。

ことわざや、きまつたいい方（これを慣用句またはイデオムという）は、その最初のことばの文例（例の下）や、子見出し（見出しの説明の次に、太い字で、見出しより一字下げで示してある）のついています。そこで、その意味や由来を調べましょう。なお、「あ」「や」「い」などはじまりの見出し（音見出し）の下に、いろはがるたの文句がのついています。その意味も、その最初のことばから引けば分かります。

⑤ そのことばが、大切なことばかどうか分かる。

みなさんが、ふだん使うことばの中で、その意味や使い方をどうしても知っている必要のあることばには、見出しの上に、*がついています。

* のついたことは、実際に使いながら、十分に身につけましょう。

II 6 ことばの書き表し方が分かる。
文を書くとき、仮名で書けばよいのか、漢字で書けばよいのか、漢字で書くなら、どんな漢字で書けばよいのか。また、どこを漢字で書き、どこを仮名で書けばよいのか（これを送り仮名という）。さらに、「大きい」を「おおきい」と書くか、「おうきい」と書くのか、「鼻血」は「はなぢ」なのか、「はな」なのか（これを仮名づかいという）。これらもこの辞典を引いて調べましょう。見出しの下に「」の中や、説明で分かります。

なお、「」の中の漢字に、や・がついているときは、教育漢字（国語の教科書で習う漢字）でない漢字ですので、仮名で書いてもよいわけです。とくに、・は常用漢字（今の生活にぜひ必要な漢字）以外のむずかしい漢字です。したがって、これは、漢字で書けばこうなるという意味ですから、しいて漢字で書くことをおぼえなくてもよいものです。しばしば、「」は漢字で書いてあるのに、文例では、仮名で書いてあることがあります。それは、ふつう、小学生は仮名で書いたほうがよいということを示しています。

7 ことばのアクセントが分かる。
ことばにはアクセント（発音したときの、高い部分と低い部分の違い）があります。発音が同じことば（同音語）を口に出して言ったとき、音の低い低いがどこにあって区別がついたり、そのことばらしいまとまりがつくのかを、この辞典で調べましょう。たとえば、「すすめる」の「」の部分が高くたいらで、——のなところは低くたいら、「たかい」の「た」は低く、「か」は高く、すぐ下がって「い」は低いことを示します。

なお、アクセントは、共通語（標準語）のアクセントを示してあり、地方によつては違えばいもあります。この辞典によつて共通語のアクセントを知ることができます。

8 漢字の読み方（音・訓）や書き方（送り仮名また筆順）、部首・画数、習う学年、意味・使い方が分かる。

この辞典は、漢和辞典（漢字からことばを調べる辞典）をかねています。漢字について調べたいときは、

a 読み方が分かっているときは、ふつうの引き方で引きます。その

ばあい、漢字の音訓のうち、音（大むかし、中国から入ってきた読み方。日本でそれをまねた読み方もある）が分かっているれば、音で引きますと、すぐ漢字の見出しが分かります。漢字の見出しはカタカナで示してあります。なお、漢字には、二つ以上の音があるときがあります。よく使う音のところは、見出しのカタカナも漢字も大きい字で、それ以外の音のところは、小さい字で示してあります。二つ以上音のあるときは、説明の最後に、ひで他の音も見なさいという指示がありますので、そこらも見ると、漢字について十分に理解できます。

音のない漢字は、訓（日本で漢字につけた読み方。もともとの日本語）で引きます。大きなひらがなで出ています。なお、訓のことばは、ふつうの大きさの見出しにすべて立ててあり、説明の最後にひで音の場所を示してあります。

6 読み方が分からないときは、付録の最後についている漢字索引で、漢字の画数とかたちから、どこに見出しがあるかを調べます。

この辞典では、教育漢字のほかに、ふたんの生活でよく使う漢字もたくさん入れてあります。学年配当のついていない漢字です。たとえば「松」の「松」、「改札口」の「札」、「結婚」の「婚」などです。

なお、「」の中の漢字は、教科書体（ふつう書く書体）ですが、大きい漢字見出しには、「」の下に、大人の新聞や本で一般に使われている明朝体（が）示されています。

II 9 同類語や反対語・対照語、動詞の自他が分かる。

「あの・この・その・どの」のように同じくみたてのことばは、「あとかたづけ・あとしまつ」のように似かよった意味のことば（同類語）は「」の記号の下に、「アラス・マイナス」のように反対の意味を表すことば（反対語）は「X」の記号の下に、「父・母」のように組みになることば（対照語）は「」の記号の下に示されています。なお、似かよった意味のことばは、「」をつけ

ないで、意味の説明のあとにならべてあることも多いです。II・X・の下のことばは、ふつうは、見出しに出ていますが、意味がすぐ分かったり、この辞典には必要でないことばなどは、見出しには立っていません。「あるく・うごく」など、動作をすることばは、つまり動詞には、次の二つ

7 この辞典の使い方

のはたらきがあつて、対になり、ことばのかたちが変わることがあります。

③ 自分がみずからする。——自動詞 [例] 起きる。

④ 他人に何かをはたらきかける。——他動詞 [例] 起こす。

動詞の自他とは、このようなことをいいますが、それは、説明の末尾の下に、見出しと対になるかたちを示してあります。

⑤ ことばのつくり方や、ことばのつなげ方が分かる。

あることばや漢字が、他のことばや漢字とつながって、どんな別のことばができるか(これを複合語または熟語という)、他のことばとつながって、どんな言い方のまとまりができるか(これを句または文という)、この辞典の②(語例・複合語、熟語)、③(文例・句、文)や、予見出しを見て調べましょう。

このように、この辞典は、いろいろな使い方ができます。ここに上げただけにも、さまざまな使い方ができますが、みなさんが、この辞典の内容を十分に使いこなして、自分なりに見つけてください。

二、この辞典の引き方

辞典には、いろいろな種類があります。

① ことばの辞典(辞典)——国語辞典・古語辞典・漢和辞典・英和辞典・外來語辞典など。

② 文字の辞典(字典)——仮名字典・漢字字典など。

③ ことばの辞典(事典)——百科事典・音楽事典・人名辞典など。

内容のむずかしさ、やさしさの上からも、小学生むき、中学生むき、高校生むき、大学生むき、先生むきなど、使う人によってさまざまです。辞典は、使う年代や使う目的によって、一番ぴったりした辞典を選ぶことが大切です。この辞典は、みなさんがはじめて使う本格的な小学生むきの国語(日本語)の辞典です。

この辞典のくみ立ては、表紙のうら(見返し)に目次がのつていますが、この辞典の本文は、ことばが五十音順にならべて示されています。引き方の①たとえば、「やま(山)」ということばを引いてみましょう。

この辞典を手にとると紙の切り口(これを小口という)に赤い部分が十段あります。見返しの五十音図の索引で示されているように上から順に、あ行・か行……わ行を示しています。そこで、「やま」は、や行つまり八段目のところを開きます。すると、小口よりの赤い部分に、「や・ゆ・よ」がそれぞれ赤い字で示されています(これを「め」という)ので、「や」のところをあけます。次に、本文のページの右の方に横に仮名がならんでいるところ(これを「柱」という)を見ます。柱はそのページにどこからどこまでどのことばが入っているかを示していますので、「やま」の入っている柱をさがします。七一ページの「やぶいし」や「やまぐ」がそれに当たります。こんどは、そのページの五十音順に見ていきますと、二段目の左よりに「やま」が見つかります。

引き方の② こういう引き方が身につけば、いちいちこのように引く必要はありません。自然に自由に引けるようになります。ただし、次のことをよく頭に入れておいてください。

① 見出しはふつうひらがなで示されていますが、外国から入ったことばと漢字の見出しはカタカナで示されています。しかし、ひらがなとカタカナは区別なく、同じ音としてとらえます。

② 見出しは五十音順にならべてあります。これは最初の音だけではなく、はじめの音が同じものは二番目の音で五十音順に、二番目も同じなら三番目の音で、というように、下の音にくり下がりながら五十音順になっています。

③ 濁音(が・ぎ・だ・ばなど)や半濁音(ぱ・び・ぶ・べ・ぼ)は、清音(か・き・た・はなど)のところ、つまり、濁音の「ろ」や半濁音の「ろ」をとったかたちで引き、同じかなのならびになったときは、清音・濁音・半濁音の順にならべてあります。

④ 促音(っ)や拗音(ゃ・ゆ・よ)も、まずふつうの音(直音)と同じように引き、同じかなのならびになったときは、直音・促音・拗音の順に引きます。

⑤ 長音は、ひらがなは、かなの通りに引けばよいのですが、カタカナのときは、「ー」で表しますので、注意が必要です。長くのびたときの音、つまり、「ケーキ」なら「ケエキ」のところで引きます。

① 「行く」「美しい」「ほんのり」などのことは、実際に文の中で使うときは、「行かない」「行け」、「美しく咲く」「美しかった」、「ほんのり」のように下の方のかたちを変えて使います。このようなことは、「行く」「美しい」「ほんのり」のように言い切りのかたちにもどして引きます。

なお、一字目の各音のはじめに、音の見出しが赤いかこの中に示され、また、そのページの右側または次のページの右側の上段に、その音の仮名と絵が示されていますので、引くときの目安にしてください。

三、この辞典の、その他の約束

すでに、この辞典の約束について、くわしく述べましたが、その他、この辞典に使われている約束を説明しておきます。

楽器の名まえや音楽に使うことはであることを示す。

植物の名まえや植物に関することはであることを示す。

けもの名まえであることを示す。

こん虫の名まえであることを示す。

さかなの名まえであることを示す。

鳥の名まえであることを示す。

病氣の名まえや病氣に関することはであることを示す。

スポーツに関することはであることを示す。

天気に関することはであることを示す。

天体に関することはであることを示す。

ひの下のかたちを見なさいということを示す。

説明がなくて、いきなりひのついた見出しを「から見出し」といいます。

【例】しゅふ【首府】ひしゅと。

【例】説明を短かくするために、または、の意味を表わして、同じ説明を省略するしるしです。

【例】世話をすること【役】——世話をすること。または、世話をすること。

【例】（ ）ことはの使い方や参考になる説明、ことばの歴史などが（ ）の中で述べられていますが、説明を省略した、次のような用法もある。

ることをおぼえましょう。

【例】いちばん上の役（の人）。——いちばん上の役。また、いちばん上の役の人。

なお、（ ）の中に入った少し小さな仮名は、上の漢字の読み方を示しています。子見出しの漢字に、たとえば、推進器（—き）とあるばあい、親見出しと同じなので、—の部分は読み仮名を省略したことを示します。

①②③……見出しに意味がいくつもあるときに、意味を分類して示すしるしです。

文例【三】についているばあい、見出しのことばに当たる部分であることを示します。——が見出しについているときは、アクセントを示すことは前に述べました。

画 漢字の見出しの説明にあり、その漢字の音をカタカナで示してあります。

画 漢字の見出しの説明にあり、その漢字の訓をひらがなで示してあります。そのうち、太字の仮名の部分は、漢字の当たるころ、ふつうの字は、送り仮名です。

画 漢字の見出しの一番下にあり、その漢字を習う学年（学年配当）を示します。日とあるのは、一年で習う漢字です。

画 漢字の見出しの大きな（ ）の中の漢字は、文部省で発表された教育漢字の標準字体です。この通りに書かないと間違えだというわけではありませんが、はじめて漢字をおぼえるときは、このかたちでおぼえるようにしましょう。

筆順は、赤と黒の二色で示してあります。赤の順に漢字を完成させていきましよう。



五十音図で、あ行の一番目（あ列）いろはで36番目。ローマ字ではa。
*頭かくしてしりかくさず。

あ、うれしい「おどろいた」。

とを、そのとおりだと思ふ時に出す声。
ああ、そうですね。

ああ あんなに。あのようにな。わたしも
ああすればよかった。ああでもない、こ
うでもない。

アーケード^{リキ} 商店街（しやうてんがい）などの歩道の上に、屋根のように取り付けたおおい。また、その商店街。

アーチ リキ ① れんがなどを、弓形(ゆみがた)につみ上げた建築(けんちく)。② 運動会やお祝(いわ)いのときなどに作る、スギやヒノキの

アーメン
の後に、
アーレン
土地の広さの単位(たんい)。一ア

土地の広さの単位(たんい)。一ア

ールは一〇〇平方メートル。aであらわす
アイ【愛】 愛 のつかんむり
 (三)・13画 四

音
ア
イ

①かわいがる。愛情(あいじょう)。愛大。愛馬。親愛。②たいせつにする。愛護(あいご)。愛国。博愛(はくあい)。③心がひかれて、すきになる。愛好(あいこう)。愛着。愛読。

順筆 𠂇 𠂈 𠂉 𠂊 𠂋

あい—【相】（あることはの上につけて、次の

のよすがを意味し、をまねた。①いしよに。②相手。相乗り。②たがいに。③相対あいた)する。相打(うち)ちの調子(ちようし)をことのえたり、強めたりする。④相変(あいか)わらず。ムソウ(相)。あいにく【愛育】かわいがって育(そだ)てる

あいいろ【藍色】 藍という植物の、葉や茎

濃(こ)い青色。

あいかが【合いかが】 ある錠(じょう)をあけることができるように作った、別(べつ)のかぎ。【合(あ)い(あ)いがき】を作る。

あいかわらず【相変わらず】前と同じように。いつものように。『うちの者は、相変わらず元気です。』

あいきよう【愛きよう】①ここにこしてかわいらしいこと。②ぼくの妹は愛きようがある。③あいそのよいこと。おせじのじょうずなこと。④店のおばさんがお客に愛きようをふりまいている。

あいくるしい【愛くるしい】たいへんかわいらしい。
 三 赤ちゃんの、小さい口もと

① かわいがって、かって

犬をかわいがること。愛犬家。

と、引き分け、「じゃんけんぽん、あいこ
でしよ。またあいこだ。

あいこ【愛護】 かわいが つて、たいせつに
 すること。愛護する。動物愛護週間。

あいこう【愛好】 すきこのむこと。愛好する。愛好家。わたし家族(かぞく)はみ

んなスポーツを愛好している。

あいこう【愛校】 自分の学校をだいにす

ること。愛校心
あいこく【愛国】 自分の国をだいにする

愛国心(—しん) 国を愛する心。祖国愛(そ

あいことば【合い言葉】 ①仲間(なかま)どう

し、仲間であることを示(しめ)す合図(あはれ)に使うことば。②みんなが、それを行

動のめあてにすることは、「三」みんな元氣
で」というのが、ぼくらの合いことばです。

あいさつ ①人に会ったときにとりかわすことはや動作(どうさ)。
②「おはよう」とあい

さつする。②会合や手紙のはじめや終わりに言う「使う」ことは。㊦あいさつする。

あいじ【愛児】 かわいがっている、自分の

子とも 愛児の写真(しゃしん)

あいしょう【愛称】 親しい気持ちをこめて

よふ。本名以外(いかし)の名まえ。ニックネーム。三妹は色が黒いので、「黒ちゃん」という愛称でよばれる。



〔アイスホッケー〕

あいしょう【愛唱】すきて、いつも歌うこと。愛唱する。愛唱歌。
 あいじょう【愛情】かわいいと思う気持ち。やさしい、あたたかな心。親と子の愛情は、何よりも深い。愛する。
 アイス ①氷。②アイスコーヒ〖。③アイススケート。④アイスクリーム。⑤アイスキャンデーの略。⑥アイスホッケー。スポーツの一種（いっしょ）。スケートをはいて氷（こおり）の上でやるホッケー。ホッケー。
 あいず【合図】相手（あい）に、前もって約束やくそくしてある方法で、何かを知らせること。また、その知らせ。合図する。
 あいする【愛する】①かわいがる。公園の草木を愛しましょう。②すきだ。音楽〔絵〕を愛する人。③だいいじにする。母校を愛する。④にくむ。
 あいそ【愛想】①人にあたる感じ。あい

そう。あいそがいい。②もてなすこと。③なんのあいそもてきませんでした。愛想をつかす。すっかりいやになる。
 あいだ【間】①物と物とはさまれた、すきま。②机（き）と机の間を通る。③へだたり。④時間。⑤校門から教室までの間が長い。⑥時間。⑦給食（きゅうしょく）までの間が待ち遠しい。⑧間（かん）が。⑨間柄（かんが）。（人と人との関係（かんけい）。）
 あいだたりは兄弟の間がらです。
 あいたいする【相対する】両方が向かい合う。さし向かいになる。赤組と白組が相対してならんでいる。
 あいたくちがふさがらない【あいた口がふさがらない】あきれかえって何も言えないようす。
 あいちゃく【愛着】かわいくて、はなれられないこと（気持ち）。愛着する。愛し使なれた辞書（じしょ）には、深い愛着を感じて。
 あいちょう【哀調】もの悲（かな）しい調子（ちょうし）。しみりとした感じ。哀調をおびた歌声が聞こえる。
 あいつぐ【相次ぐ】つぎつぎと続（つづ）く。①相次ぐ交通事故（じこ）。マラソンの選手（せんしゅ）が相次いでゴールインした。
 あいづち ①かじ屋（や）が、焼（や）いた鉄（てつ）をたたいて、いろいろの道具を作るときに、相手になってつちを打つこと。②人と話をするとき、調子を合わせること。あいづちを打つ。
 あいて【相手】①いっしょに物ごとをする、いっしょの人。遊び相手。話の相手をする。②競争（きょうそう）をするとき、の、いっしょの人。相手をうち負かす。

アイデア 考え。思いつき。よいアイデアが浮（う）かぶ。アイデア。
 あいどく【愛読】すきて読むこと。愛読する。愛読書。愛読者。この本は、昔（むかし）から愛読しています。
 アイドル 多くの人があこがれている人。みんなから人気のある人。あの歌手は、子どもたちのアイドルだ。
 あいにく つかうの悪いようす。運悪く。あいにく品切（しなきり）れます。おあいにくさま。
 アイス 現在（げんざい）（ひんぎん）、北海道や樺太（かふと）などに住んでいる、ある種（しゅ）族（ぞく）の名。
 あいのこ【合いの子】①人種（じんしゅ）のちがった父と母との間に生まれた子。混血児（こんけつじ）。②種類（しゅるい）のちがった動物どうしの間に生まれた子。③どちらともつかない性質（しやうせい）のもの。
 あいのり【相乗り】乗り物に、いっしょに乗ること。自転車の相乗りはいけません。
 あいばう【愛馬】かわいがっている馬。
 あいばう【相棒】（仕事などをいっしょにする相手（あい）。仲間（ななかま）。）
 あいま【合間】ある時刻（じこく）から時刻までの間。勉強（べんきやう）の合間（がま）にテレビをみる。
 あいまい はつきりしないようす。たしかてないようす。返事（へんじ）があいまいだ。
 あいよう【愛用】氣（き）にいて、いつも使（つか）っていること（もの）。愛用する。愛用のバット。
 あいらしい【愛らしい】かわいらしい。
 アイロン 布（ぬ）のや衣服（いふく）のしわをのばしたり、折り目をつけたりするのに用いる電氣器具（でんきぐ）。アイロンをかける。

*はたいせつなことは 例は語例 文例 同類語 反対語 対照語

あ

赤の他人(たにん) 血(ち)のつながりが、全くない人。全くの他人。

あかあかと【赤赤と】 まっかに。❶キャン

プの火が、夜空に赤赤と燃(も)え上がる。

あかい【赤い】 血(ち)の色に似(に)た色をしている。❷夕日(ゆづり)が、空を赤くそめる。❸セキ【赤】。

あかがね (赤金という意味) 銅(どう)。

あかく ①馬(うま)などが前足で地面をかく。②じ

たはたする。もがく。③いろいろな心をつか

ても、もうどうにもならない。

あかげ【赤毛】 赤色をした(かみの)毛。

あかご【赤子】 生まれたばかりの、赤みが

かった子ども。赤ちゃん。赤んぼう。

赤子の手(て)をねじる【ひねる】 (赤ん

ぼうの手)をねじる【ひねる】ようにしたや

すく相手(あいて)を負(お)かすこと。たえ

あかさび【赤さび】 鉄(てつ)にできる、赤色のさ

び。❸はさみに赤さびが出た。

あかし うたがわしい事(こと)をばつきりさ

めること。また、その証拠(しやうこ)。「身

あかす【明(あ)かす】 ①はつきりさせる。うち

あける。❷手品(てひん)のたねを明(あ)かす。本心(ほんしん)を明

かす。❸夜(よ)をすこす。❹寝(ね)ないて夜を

明(あ)かす。❺メイ【明】。

あかちやける【赤茶(あか)ける】 赤みがかった

茶色(ちやうしき)になる。❶たみ(たみ)が日にやけて、赤茶

けた。

あかちゃん【赤ちゃん】 生まれたばかり

の子(こ)どもを、親(おや)しい気持ち(こころ)をこめてよぶこ

とば。赤んぼうの愛称(あいしやう)。

あかつき【暁(あ)かつき】 ①夜明け。②きぼうが

あつたとき。❶兄(あに)は、卒業(そつぎやう)のあ

かつきには、会社(かいし)につとめるそう。

あかつち【赤土(あ)かつち】 鉄分(てつぶん)をふく

んだ、赤っぽくて茶色(ちやうしき)い土(つち)。黒土(くつち)。

あかぬけ【あか抜け】 (すがた、形(かたち)や、でき

ばえなどが)すつきりとして美(う)しい。あか

抜けする。❶あか抜けしたデザイン。❷や

あからむ【赤らむ】 (顔(かほ)が)赤(あか)くなる。❸は

ずかしくて、顔(かほ)が赤らんできた。❹赤らめ

る。❺セキ【赤】。

あからめる【赤らめる】 (顔(かほ)を)赤くする。

❸はずかしさで、顔(かほ)を赤らめる。❹赤らむ。

あかり【明(あ)かり】 ①光(ひかり)。❷月明(げつめい)かり。星明(せいめい)

かり。❸明(あ)かりがさす。②ともしび。電灯(でんとう)

(でんとう)。❹明(あ)かりをつける。❺メイ【明】。

明(あ)かり取(と)り 光(ひかり)を入れるためのまど。

❶屋根(やぐら)の明(あ)かり取りから星(ほし)が見える。

あがる【上(あ)がる】 ①下(した)から上(うへ)へいく。

❶階(かい)に上(あ)がる。米(こめ)のねだんが上(あ)がった。

❷おるる下(した)がる。②のぼせてほうつと

する。❸舞台(ぶたい)に出(で)たおたん、すつか

りあがつてしまった。③「食(く)べる」のむの

ていねいな方(かた)方(かた)。❹お茶(ちや)をおあがりくだ

さい。④「行く」「たずねる」のへりくだった

いい方(かた)。❶おたくへは、夕方(ゆふぐ)上がりま

あかるみ【明(あ)かるみ】 ①明(あ)るい所(ところ)。②お

おや

あかるみ【明(あ)かるみ】 ①明(あ)るい所(ところ)。②お

おや

あかるみ【明(あ)かるみ】 ①明(あ)るい所(ところ)。②お

おや

あかるみ【明(あ)かるみ】 ①明(あ)るい所(ところ)。②お

おや

あかるみ【明(あ)かるみ】 ①明(あ)るい所(ところ)。②お

おや

あかるみ【明(あ)かるみ】 ①明(あ)るい所(ところ)。②お

おや

あかるみ【明(あ)かるみ】 ①明(あ)るい所(ところ)。②お

おや

あかるみ【明(あ)かるみ】 ①明(あ)るい所(ところ)。②お

おや

あかるみ【明(あ)かるみ】 ①明(あ)るい所(ところ)。②お

おや

あ

あきれる 思ってもいないことなので、おどろく。あつげにとられる。『あの子のいたずらには、あきれてものが言えない。』

あきんど ひとようにん(商人)。

アク【悪】悪

こころの部
(心)・11画

①アク②オ 訓わるい。
わるい。わるいこと。『悪人。悪習(あくしゅ)。悪性(あくせい)。悪質(あくしつ)。悪用。悪意。悪友。罪悪(ざいあく)。』『悪をほろぼす。』
『善(ぜん)・良(りょう)・好(こう)。』『オ(悪)』。

筆順

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

あく ①灰(はい)を水に入れてとった、うわずみ。『あくあら。』②野菜(やさい)などにある、しぶい味(あじ)。『フキのあくをぬく。』

あく【空く】①あきがでる。『席(せき)があく。』②使わなくなる。ひまになる。『手があく。』×ふさがる。◇あける。『クワ【空く】。』

あく【明く】何かまたげになっていたものが取りのぞかれる。『目が明く。』『メイ【明く】。』

あく【開く】ひらく。『戸(かど)があく。』×しまあける。◇あける。『カイ【開く】。』

アクアラング 潜水(せんすい)に使う道具。あつさく空気を入れたボンベと、口に通する管(くだ)などで、できている。

あくい【悪意】①相手(あいて)にくむ気持ち。『悪(わる)い心。』②好意(こうい)。『悪(わる)い心。』③好意(こうい)。『悪(わる)い心。』④悪意(あくい)ではない。『善意(ぜんい)。』

あくうん【悪運】①悪(わる)い運命(うんめい)。②悪いことをしても、その報(むく)いを受ける。



〔アクアラング〕

ずにはさかえること。『悪運(あくうん)が強い。』

あくじ【悪事】悪(わる)い行(おこない)。『悪(わる)い事(こと)をしたら。』

あくしつ【悪質】①質(はた)が悪(わる)いこと。『悪(わる)い質(はた)。』②良質(りょうしつ)。③たちが悪(わる)いようす。『悪(わる)い質(はた)だ。』④たちが悪(わる)いようす。『悪(わる)い質(はた)だ。』

あくしゅ【握手】西洋(せいよう)ふうのあいさつ。手をにぎりあつて、親(おや)しみの気持ち(きもち)をあらわす。『握手(くわしゅ)する。』

あくしゅう【悪習】悪(わる)いくせ。よくないならわし。『悪(わる)いくせ。』

あくしゅう【悪臭】いやなにおい。『悪(わる)いにおい。』

あくしん【悪心】悪(わる)い心。『悪(わる)い心(こころ)。』

あくせい【悪声】①聞きとりにくい、いやな感じの声。『悪(わる)い声(こゑ)。』②悪い評判(ひやうばん)。『悪(わる)い声(こゑ)。』

あくせい【悪性】たちが悪(わる)いこと。『悪(わる)い性(せい)。』②悪い評判(ひやうばん)。『悪(わる)い声(こゑ)。』

ことしは、悪性(あくせい)のかぜがはやってる。

あくせく つぎつぎに小さなことに追(お)われて、いそがしそう。『あくせくする。』②あくせく(と)働(はたら)く。『小(こ)さいことにあくせくする。』

アクセサリー ①ブローチや首(くび)ざりなど、からだにつけるかざり。『赤(あか)い花(はな)を、ぼうしにアクセサリーにした。』②自動車やカメラなどの付属品(ふそくひん)。『アクセル。』

アクセル ①自動車に付いている仕組み。足(あし)でふんで速(はや)さを速(すみ)くしたりおそくしたりするしかけ。『アクセルをふかす。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくせんどう【悪戦苦闘】苦しい戦(いくさ)だ。『悪(わる)い戦(いくさ)。』②南極(なんきょく)へ行く(い)く。『悪(わる)い戦(いくさ)。』

あくひよう【悪評】悪(わる)い評判(ひょう)は。『不評。』好評(こうひょう)。

あくふう【悪風】悪(わる)いならわし。『都会の悪風にそまる。』美風。

あくぶん【悪文】へたな文章(ぶんしやう)。意味(いみ)がわからにくい文章。

あくま【悪魔】人の心をまよわし、悪(わる)いことをさせる、ばけもの。

あくまで ①こまても。さいごまで。『あくまで』やりとおそう。

あくむ【悪夢】気持ちの悪(わる)い、いやなゆめ。『悪夢にうなされる。』

—あぐむ ①しきれないいやになる、の意味(いみ)をあらわすことは。『考えあぐむ。』待ちあぐむ。

あくゆう【悪友】悪(わる)い友だち。『良友(りやうゆう)』。

あくよう【悪用】悪(わる)いことに使うこと。『悪用する。』善用(ぜんよう)。

あぐら 両足を前に組んですわること。また、そのすわり方。『あぐらをかく。』

あくりよく【握力】手で物をにぎる力。『握(にぎ)る』。

あくる【明くる】その次の。『あくる朝(あす)』。

あけあしをとる【あけ足を取る】ことはづかぬをためだてて、相手(あいて)をこまらせる。『自分のあけ足を取ってばかりいては、相談(さうだん)できない。』

あけがた【明け方】夜明けごろ。『くれ方(くれかた)』。

あけく【何(なに)かをした』あと。すえ。終わり。『考えたあけく、行くのをやめた。』

あけくの果(は)はて ①のすえ。結局(けつぎ)。

あけくれ【明け暮れ】①朝と晩(ばん)。②毎日(まいにち)。

日(ひ)。いつも。明けても暮れても。『母は、明け暮れ(あけくれ)子どものことを心配(しんぱい)している。』

あげしお【上げ潮】海の水が、陸(りく)のほうにみちてくること。『引き潮(ひきしほ)』。

あけ空が明(あ)け始める ①明け始める。『東(あづま)の空が明(あ)ける。』

あけたて【開けたて】(戸やしょうじなど)をあけたり、しめたりすること。

あげて【挙げて】①みんないっしょになつて。すて。残(のこ)らず。『皇国(きこく)をあげて、王子様(おうじさま)のくつを祝(いわ)つた。』

あけてもくれても【明けても暮れても】『あけくれ』。

あけのみようじよう【明けの明星】①明(あ)けた、東(あづま)の空にかがやいている金星(きんせい)のこと。『よいの明星(めいせい)』。

あけぼの 夜明け。明けがた。

あける【空ける】①あきを作る。『あなをあける。』席(せき)をあける。『ふさぐ。』②使わなくする。ひまにする。『空手(からて)をあける。』

『ふさぐ。』③からにする。『コップの水をあける。』

『あく。』④く。『空(くう)』。

あける【明ける】①朝になる。『夜が明(あ)ける。』②月日が改(あらた)まる。『年(とし)が明(あ)ける。』③ある期間(きかん)が終わる。『つゆが明(あ)ける。』

『暮(く)れる。』④。『明(あ)け』。

あける【開ける】ひらく。『戸をあける。』

あける【あく。』④。『カ(かい)』。

あげる【上げる】①上へやる。高くする。『手を上げる。』②おろす。下(くだ)さげる。③(神や仏(ほとけ)に)そなえる。④やる。『のていねいないい方(かた)』。

『先生(せんせい)に花(はな)をあげました。』

林君(りんくん)に絵(え)をわいてあげた。『やる。』④ひらめる。『名(な)をあげる。』⑤入れる。『学校(がっこう)に』。

上げる。⑥ほめる。『上げたり下げたりする。』⑦上がる。『ジョウ(上)』。

あげる【挙げる】①たくさんある中から取り出す。『例(れい)をあげて話す。』②式(しき)などをする。『あした、けつこん式(しき)をあげます。』③持つている力を全部(ぜんぶ)出す。『全力(ぜんりき)をあげる。』

『キョ(挙)』。

あげる【揚げる】①(はたなどを)高くかかげる。『はたを揚げる。たこを揚げる。』

②油(あぶ)の中に入れて、短(みじ)かい時間(じかん)に強く入れる。『天(あま)ぶらを揚げる。』③船(ふね)から荷物(にもの)を陸(りく)にうつす。荷揚げする。『船(ふね)の荷物を揚げる。』④声(こゑ)の調子(ていし)を高くする。』

あけわたす【明け渡す】自分の住んでいる(へや・家(いえ)・城(しろ)などを、すっかりからにして他人(たにん)の手に渡す。

『あぐ。』顔(かほ)の一部分(いっぶぶん)を。『口(くち)の上と下(した)』。

あぐで使(つか)う ①いばつたいたいどて人(ひと)を使う。『人(ひと)をあぐで使(つか)うようなことをする。』

あぐを出(だ)す たいへんつかれる。『アコーデオン(アコーディオン)』。

『けんばん楽器(がっき)』の一つ。じゃばらの、のびちみによって、空気が出(で)はいりし、オルガンのような音(おと)が出る。『ふうきん。』

『楽器(がっき)』。『あこがれ』①そうなりたいたく強く望(ぞ)むこと。または、その気持ち。②心がその方(かた)へひきつけられること。』

あこがれの的(まと) ①(みんながそうなりたいたく)心に強く望(ぞ)んでいる、めあてのもの(人)。

②心がひきつけられるもの。』

あ

あこがれる そうなりたいたとか、そうした

いとか、心がそのほうにひきつけられる。

あざ [麻] ①クワのなかまの植物しよくぶつ。くきの皮のうちがわのすじて、麻糸、麻つな・スツクなどを作る。②アサで作った布(ぬの)。

あさ [朝] 夜が明けてから、しばらくの間。朝風。朝めし。①晩(はん)・夕。②チヨウウ。

あざ [朝] ひふにてきる(ある)、赤・黒・むらさきなどの部分(ぶぶん)。(生まれつきあるはあいと、ぶつたりしてでるはあがある)。

あざ [字] 町や村を細かくくぎったときの名まえ。①部落(ぶらく)。②ジ[字]。

あさい [浅い] ①表面から底(そこ)奥(おく)までの長さが短(みじ)かい。②川の浅い所て泳(およ)ぶ。③色がうすい。④浅い緑色。⑤少ない。足りない。⑥考えが浅い。⑦深い。⑧セン[浅]。

あさおき [朝起き] 朝早く起きること。早起き。

朝起きは三文(さんもん)の得(とく) 早起きをすると、何かいいことがあるというこ

とわざ。(早起きは三文の得ともいう)。

あさがた [朝方] 朝のうち。朝の早いころ。

あさぎり [朝霧] 朝、立ちこめる霧。

朝霧が立ちこめる。夕ぎり・夜ぎり。

あさぐろ [浅黒い] (ひふの色などが)うす黒い。

あざける 人をばかにして、悪口(わるぐち)を言ったり、笑(わら)うたりする。

あさせ [浅瀬] 川や海の、水が浅くなつて

いる所。①浅瀬に船を乗り上げる。

あざつて あしたの次(つぎ)の日。明後日(みょうごにち)。

あざつゆ [朝露] 朝、草の葉などにたまっているつゆ。①朝露が光る。②夜露(よつゆ)。

あさなぎ [朝なぎ] 朝方、海風と陸風(りくかぜ)が入れかわる時、風がやんで、波がしずかになること。夕なぎ。

あさはか [浅はか] 考えが足りないようす。①あさはかな人だ。

あさはん [朝飯] 朝の食事。朝御飯(あさごはん)。

あさばん [朝晩] ①朝と晩。②朝晩歯(は)をみがく。③いつも。毎日。④朝晩待ち(まち)つづける。

あさひ [朝日] 朝、東からのぼる太陽(たいよう)。

あさまし [浅ましい] ①性質(せいしつ)がおとつていて品(しな)がない。②さもない。③するをして、勝(か)つのはあさましいことだ。④みじめだ。なさない。⑤あさましいすがたになつて帰(か)ってきた死(し)体(たい)で帰(か)ってきた。⑥あさむく [欺く] ほかのものとまがえさせる。だます。⑦昼(ひる)を欺(か)く明るさ。

あさめし [朝飯] ①あさはん。②夕飯。

朝飯前(あさめし) (物ごとをするのが)やさしいこと。①こんな問題(もんだい)なら朝飯前(あさめし)だ。

あざやか [鮮やか] ①さわだつて、はつきりしているようす。②あざやかな色。③てびわよく、りつばなようす。④あざやかにヒットを打(う)つ。

あさやけ [朝焼け] 日の出前に、東の空が赤く見えること。①夕焼け。

あさゆう [朝夕] 朝と夕方。①朝夕めつきりすずしくなつた。

あざらし 北(きた)の海に住む動物。ひれの形をした四本の足で陸(りく)をはたりおよいだりする。毛皮(け)やあぶらをとる。①えさをあさる。②さかなや、海藻(かいそう)などをとる。③物をさがしまわる。④本(ほん) [安物(やすもの)をあさる]。

あざわらう [あざ笑う] 人をばかにして笑う。

あし [足] ①人や動物が、立ったり、歩いたり、走ったりするとき使うもの。②く

るふしの下の地面につく部分(ぶぶん)。③大きな足。④歩くこと。走ること。⑤足が

よい。⑥机(こ)つえなどをささえているもの。⑦この机は足が長い。⑧手。⑨ソク[足]。⑩足が出(で)る。かんじようが足りなくな

る。損(こ)んをする。⑪足が鈍(に)る。⑫歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。⑬歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。⑭歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。⑮歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。⑯歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。⑰歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。⑱歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。⑲歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。⑳歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。㉑歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。㉒歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。㉓歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。㉔歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。㉕歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。㉖歩き方が、だんだんお

足が鈍(に)る。㉗歩き方が、だんだんお



[あざらし]

*はたいせつなことは ①は語例 ②は文例 ③は同類語 ×は反対語 ④は対照語